



ユーカリ会 75周年イベントが開催される！

11月15日
(土)、明石校舎
の旧中学校体育
館(現在は附属小学
校の体育館)にて、ユーカリ
会の75周年イベントが開
催され、120名近い卒業
生が集まりました。

2024年11月に開催
された「校舎お別れイベン
ト」に続き、多くの卒業生が集まり、天候にも恵まれたこともあり、非常に心温まる時間となりました。

ユーカリ会は附属明石中学校の卒業生の同窓会で、附中1回生(1950年3月)が卒業されてから75年が経過したことを機に、今回のイベントが企画されました(なお、附属中学校は明石も住吉も1947年に開校し、62代の卒業生を輩出しました。中等1回生の一つ上の学年が附中62回生にあたります)。このイベントでは、過去に附属明石中学校に在籍されていた先生方による“授業”が開かれたほか、ユーカリ会から附属小学校に対して体育館に敷くフロアシートの寄贈が行われました。また、40学年ほどの卒業アルバムも展示され、参加した皆さまが楽しそうに自分の学年や先輩・後輩の学年のアルバムのページをめくっている様子が見られました。

附属明石中学校の校舎は取り壊され、附属学校の改変により「附属中学校」の校名もなくなりましたが、ユーカリ会の皆さまの附属愛は全く変わらずで、同じ附属を卒業した者としてとても嬉しく、そして大変心強く感じました。

これからも明石、そして住吉の卒業生とともに、同窓会活動をより一層盛り上げていきたいと改めて思いました。



附属住吉小・中学校の東京同窓会が開催される！



10月4日(土)、附属住吉小・中学校の東京同窓会がレストランアラスカ（日本プレスセンター店）で開催されました。100名近い卒業生が一堂に介し、母校からも高木校長にお越しいただいたほか、中等卒業生も16名参加しました。

昨年と同じく立食形式で、今年も幹事の皆さまが工夫された企画を実施されたこともあり、先輩方から中等卒業生へたくさんお声掛けいただき、とても盛大な会となりました。

東京同窓会は来年も開催されますので、関東圏にお住まいの卒業生の皆さん、ぜひ足をお運びください。



ユーカリ会の東京支部会も！

11月8日(土)、2年に一度開催されているユーカリ会の東京支部会が、御茶ノ水のGood View Diningにて開催されました。当日は附中10回生～57回生と中等卒業生が計50名以上集まり、各学年がステージに上がって近況報告などが実施されたほか、旧附属明石中学校の校舎が取り壊されている様子を収めた写真が展示され、参加者が互いに附属への想いを語り合える機会となりました。

また、今回東京支部会が開催されたレストランは、日本大学の駿河台キャンパスの19階という超好立地で、四方を東京の摩天楼に囲まれた壮大な景色の中で終始和やかな時間となりました。



卒業生だより

山内 駿斗さん [中等2回生]

初めまして。

附属を卒業したのが2016年なので、もう少しで卒業から

丸10年が経とうとしています。この10年の中で、大学入学、大学院、そして社会人へとライフステージが大きく変化しました。今回は附属卒業からの10年間のことを少し振り返りつつ、10年経った今改めて「グローバルキャリア人」について考えていただけたらと思います。

附属では「グローバルキャリア人」というキーワードが印象深く残っています。「グローバルキャリアとは何か」を考えさせる授業も何度かあった記憶です。中高生の頃から海外に関わる仕事をしたいと思っていたこともあり、当時は「グローバル化が進む世の中で、何某か海外と絡むキャリア」くらいの浅い理解でしか捉えられていませんでした。そして、その道に進むべく外国語や文化等を学ぶ大学に進学したのですが、将来の夢、ひいては「グローバルに生きること」自体に対して曖昧さや具体性のなさに些か不安や疑問を抱くようになりました。何せ当時は日本とイタリアや世界を繋げる仕事をしたいとしか思っておらず、その裏にあるべき自分の理念等がなかったのです。

そこで、自分の核心的な価値基準は何であり、どのような選択を行うことが自身の幸せに繋がるのかについて再度見つめたいと考えました。当時経済学を研究るために大学院進学を考えていたこともあり、研究をしながら何故経済に魅力を感じ、そして自分はどこに価値基準を置いているのかについて整理することにしました。

そもそも、僕は「数学的に」合理的ではない人間の行動が、実は数式を用いて近似できるという点で経済学に興味を持っていました。そして思考を進める中で、そうした理論に裏打ちされた経済政策や金融政策によって、人間社会が支えられている点にも面白さを見出していたことが分かりました。ここで、海外に関係する仕事についても、日本と外国の関係性を支えられる点に魅力を感じていたのだと気付かされ

ました。こう考えると常に「何かを社会の基盤を裏支えすること」が僕の価値基準として重視されているのだと思われます。この価値基準に則り、現在は通信インフラに関わる仕事を行なっています。

こうした思考の中で、「グローバルキャリア人」というキーワードについて思い出されました。結論としてですが、必ずしも「直接的に海外に関わること」がグローバルなキャリアではなく、「遍在的な技能やキャリアをもつこと」もグローバルであると言える、という答えに至りました。何かの分野において深い技量を身に付けた時、それはその企業や日本のみではなく、グローバルな社会においてどこでも通用する場合がほとんどな



Shunto Yamauchi

中等在学時はテニス部に所属。東京外国语大学ではイタリア語を、修士課程では一橋大学大学院では経済学を専攻。多彩な才能を活かして社会人としても活躍中。

のではと考えたのです。つまり、何かに精通することこそがグローバルキャリア人なのではと。

さて、現在の僕の人生はグローバルキャリア人に向かっているのかです。現在は幸いにも海外向けの部署に配属されているため、過去にイメージしていたようなグローバルなキャリアを歩めています。しかし、現在は技術力を身につけているところなので、偏在性はないと言えるでしょう。様々思考して見出したグローバルキャリア人となるには、通信インフラに対する専門性は不可欠であり、そして身につけたいと考えています。今後は技術力の研鑽を行い、附属の卒業生として「グローバルキャリア人」のキャリアを歩んでいきたいと思います。

卒業生だより

脇阪 紀恵さん [中等10回生]

寒い日が続いておりますが、卒業生の皆様、並びに教職員の皆様はいかがお過ごしでしょうか。初めまして、中等10回生卒業生の脇阪紀恵です。

この度は陽菊の寄稿のお誘いを頂き、誠にありがとうございます。

私は昨年浪人を経て、今年から東京大学に在籍し、学業に励んでおります。原稿内で浪人生活について言及している方が少なかったと思うので、少し浪人時代について触れさせて頂きます。浪人した一年間は、しんどい部分はあったものの、自分がどれだけ多くの人に支えられているかを実感した一年間でもありました。日々支えてくれた家族、定期的に連絡をくれたり、会いに来てくれた友人、先生方。中等時代の忙しい日々の中では気づくことのできなかった、そうした存在のありがたみに改めて気づくことができました。この場をお借りして、心より感謝申し上げます。

晴れて今年より東京大学に入学し、現在は大学内外で様々な人から刺激を受ける日々を送っております。そのような方々との交流を通して、自分がこれまで生きてきた世界の狭さを改めて感じるようになりました。また、高校時代に比べて自由な時間が増える一方で、何に時間を使うかを自分自身で決めなければならず、これで良いのだろうかと日々自問自答しております。加えて、校則によってある程度守られ、覆い隠されていた自分自身の課題が表面化し、それらと向き合う日々でもあります。綺麗事かもしれないが、大学生活を通してそのような自分の課題と向き合い、一歩ずつ前に進んでいきたいと考えております。

このような大学生活の中で、中等での経験に助けられていると感じる場面も多くあります。例えば、英語で論文を書く授業では、中等で学んだKPが生かされています。中等教育学校で得たものは、私にとってかけがえのない財産です。技術的な学びに加え、生徒主体で何かを作り上げるという経験、どのようにことにも挑戦する精神、そして先輩・後輩・同輩を問わず出会えた一生の仲間たち。自分がどれほど恵まれた環境に身を置いていたのかを、卒業して初めて実感しました。



Kie Wakisaka

在学時は国際統計ポスターコンテストにて一等賞を獲得するなど優秀な成績を修める。大学ではアメリカンフットボール部でマネージャーとしても奮闘中。

この環境は、卒業生の皆様および教職員の皆様が代々築き上げてくださったものだと思っております。本当にありがとうございました。私も今後は一卒業生として、微力ながら何かしらの形で貢献できれば幸いです。

末筆ながら、文才のかけらもない私の拙い文章を最後までお読みください、誠にありがとうございます。皆様のご健勝とご多幸を心よりお祈り申し上げます。

先生だより

軽尾 弥々先生

同窓生の皆様、お元気にお過ごしでしょうか。軽尾です。卒業生の皆さんとは5回生の1年生から始まり、8回生は6年間を担当しました。授業だけの関わりでは、1回生、7回生にお邪魔しました。現在は14回生を入学から持ち上がっていて、4年生を担当しています。気がつけば附属での教員生活が13年目となり私の教員人生の3分の2は附属で教えていくことになります。その数字に驚くとともに、附属での生徒との日々はいまだに新鮮なことに溢れていることに驚きます。

私自身は国立大学附属校の出身ではありませんし、実は本校の採用試験を受けたのも附属だからということにこだわりがあったわけではありません。知っている先生が勤めていて勧めてもらったわけでもなく、もっと言えば兵庫県出身でもありません。私立の女子校での6年間の勤務の後、よく言えばギャップイヤー中で（正直に言えば無職ですね…）次の教職の仕事を探していたところたまたま採用試験の情報を得て、採用に至りました。こういうことを縁というのかな、と今の私は思います。

この10年で神大附属はすごく変わったように思えますが、中で働いているいち教員からすれば、変わらず受け継がれているものが、あるように思います。もちろん学校を取り巻く社会自体が、働き方改革やコロナ禍を経て大きく変化している時なので実務面の変更・改善は多々あります。（Learners' Agoraを見て、驚く卒業生も多いですね。）それでも、本質的には変わらないことがあります。それは自分がやってみようという社会や他者に対するポジティブな姿勢です。十数年前の附属生も、もちろん今の在校生も、失敗に終わったとしても、やってみることが「普通」なんです。成功よりもずっと多いそれらの失敗の数々は語られることはあまりないですが、失敗を繰り返しながらもまた挑戦していくのが附属生だと思います。これは、本校では「普通」に見えますが、案外世間ではそうではありません。しかも、そのような姿勢を育成することは（学校に求められているのだろうけれど）とても時間を要するし、育てようとして育つものでもありません。

この変わらないものが神大附属生のプライドなのかな、と思います。縁のなかった神大附属でこの附属生のプライドに触れられることは幸せなことだと感じています。

卒業生の皆さんにも時折このプライドを思い出していただければ、学校にとっての大きな励みです。今後もどうぞお身体に気をつけて、一人ひとりが自分の道を歩まれることをお祈りしています。



Yaya Karuo

2012年4月に中等に着任し、5回生、8回生などを担当。現在は14回生の学年主任。

学校NEWS 短信

在校生が「国際化学オリンピック」 日本代表候補に選出される

化学グランプリ 2025において、13回生の持田さんが銅賞を受賞しました。また、同大会における高校2年生以下の成績優秀者として、国際化学オリンピックの日本代表候補にも選出されました。今後、通信教育・集合教育を経

て、2026年にウズベキスタンで開催される国際化学オリンピック出場を目指します。

体育祭が開催される

10月23日(木)、明石きしろスタジアムで第13回体育祭が行われました。「開きっぱなし」をテーマに、新競技などでこれまでにない企画も実施され、非常に盛り上がった行事になったようです。

～同窓会からのお知らせ～

■ 本広報誌のバックナンバー：『陽菊-ひなぎく-』のバックナンバーを学校HPに掲載していただいています。是非ご覧ください>> <https://www.edu.kobe-u.ac.jp/kuss-top/current/alumni/association/>

■ 同窓会HPの開設準備中：明石、住吉の先輩方とともに運営している「神戸大学附属学校園同窓会」のHPの開設に向けて、準備が進んでいます。HPでは、卒業生の皆さんへのお知らせや校舎の写真などを多く掲載する予定です。2026年春頃までには開設できる計画ですので、是非お楽しみに！

寄付のお願い

母校の教育活動の支援のため、寄付へのご協力よろしくお願いします。

附属学校部HP：<http://www.schools.kobe-u.ac.jp/donations.html>



SNSで情報発信中！

Instagram、Xで同窓会関係の情報を発信しています！フォローお願いします



【編集後記】

(前回の編集後記のつづき(?)) 今回ご寄稿いただいた脇阪さんが東京大学のアメリカンフットボールチーム「Warriors」でマネージャーをしていると聞き、11月に小学生の時以来となる学生アメフト観戦に赴きました。リーグ戦の最終ゲーム、明治大学との試合で、勝った方が日本選手権出場という大一番。東京大学が私自身のライバル校だということを忘れて(?)、前のめりで Warriors を応援しました。善戦ではあったものの、明治大学の強力なランオフェンスに屈してしまい、敗北。残念な結果ではありましたが、終始試合展開に熱狂させられ、非常に楽しい一日となりました。また来年以降の躍動に期待したいと思います(それから、頑張れ Gangsters)。

本号の誌面では、山内さんと脇阪さんにご執筆いただいた、それぞれが現在に至るまでの進路やキャリアについての振り返りや母校への想いの詰まった玉稿を掲載でき、大変光栄でした。また、軽尾先生からも教師の立場で見た中等生の特長などを分かりやすくまとめていただき、とても共感しました。お忙しい中ご寄稿いただき、本当にありがとうございました。

2026年も卒業生の皆さんにとって素敵な年になりますように、良いお年を。(1回生 小黒)

(次号は2026年3月31日発行予定です)